

視点

県医師会の在り方 —存在意義から存在価値への転換—



県医師会副会長

矢吹孝志

この度、「視点」に意見を述べるにあたり、直前に会津若松医師会会長として、地元会報に「会津若松医師会の存在意義と10年後医師会の創設」を寄稿しているが、この“存在意義”は郡市医師会に限らず、県並びに日本医師会（日医）にも問われるため取り上げた。これら3医師会の“存在意義”を大部分の会員が認める所であるが、適切に理解し、その旗の下で活動している会員は極めて少ない。

「意義」とは辞書を紐解くと、“わけ”や“価値”などと記載されているが、前者の“わけ”を知るには、創立時の過去に溯り、その必然性を理解しなければ、容易に受け入れられない。しかし、後者の“価値”となると、現代でも「何をしている」、「何かをしてくれている」など客観的な評価を下すことが可能となり、身近な存在として容認できる。今回の寄稿テーマはわたくしの所属する郡市医師会の“存在意義”から出発したが、県医師会の現状と将来を考え、曖昧抽象的な意味合いを持つ“存在意義”ではなく、明確に評価される

べき“存在価値”へ呼び名を変更することを提案したいがためである。これは蛇足となるが、日本医師会についても同様であり、“価値”を全会員に明確に示さなければ、日本医師会の会員増計画は“絵に描いた餅”に帰する。

1 郡市医師会と県並びに日本医師会の創立理由の違い

郡市医師会は会員の集合体として存在し、当時の先輩諸氏が諸々の理由から必要性に駆り立てられて創立したものである。ここには医師会が存在するに足る“意義”があり、その組織の下で医師会活動が実行されてきた。

一方、県医師会は郡市医師会の集合体であり、郡市医師会の成り立ちと異なり、当該医師会の代表の総意の下で創立されたものである。さらに、日本医師会は各県医師会の代表の下で議論され、創立されたものである。この構築の在りようは医師会に限らず、多くの職業分野で実行されている。

この3医師会の役割は、国（厚生労働省）

に対しては日本医師会が、県に対しては県医師会が積極的に対応し、そこから発信された情報を郡市医師会を通してすべての会員へ伝達並びに指導することである。郡市医師会は当該地域の全会員が直接的に関与する組織であるが、県並びに日医は組織の集合体であり、全会員が直接関与することはなく、当該組織の代表者により運営されている。3医師会は今まで役割分担を明確化することで、“存在意義”を十分に発揮してきた。

2 医師会入会者の現状と展望

日医組織強化検討委員会が令和元年8月に平成30年度の都道府県医師会入会率をまとめ上げたので、そのデータを下に現状と展望を述べる。

福島県は医師数が3,888名であり、郡市医師会会員2,709名（69.7%）、県医師会2,686名（69.1%）、日医2,686名（69.1%）である。郡市医師会の組織率を100とすると県及び日医は99.2%である。全国では医師数が319,480名の中で、郡市医師会63%、県医師会59.0%、日医53.6%の組織率である。

これらを大雑把にみると、医師総数から見た組織率は60から70%であるが、当県は全国よりも組織率は良い方である。3医師会の組織率をみると、当県では23名が郡市のみの入会であり、県と日医は同数であったが、全国では県、日医と順次減少している。この傾向は前項1の創立事情の違いから容易に推測できる結果である。県医師会が過去に重きを置く“存在意義”から脱却しなければ、新規あるいは未加入医師達の医師会への期待には応えられず、順当な会員増加の見込みは望めない。日医はこの現状を察知し、今回の実態を調査すると共に、“存在意義”のみから脱却し、全会員との距離を縮める対策を講じている。

3 医師会の“存在価値”とは

医師会の存在について、極端に言えば、“意義”は昔、“価値”は現在であり、会員が求めるのは今、目と耳で確認できる適格かつ有益な情報を獲得できる“価値”である。残念ながら、過去に尊敬をもって振り返る余裕もなく、先の医療事情も不透明という世知辛い世の中の一事象でもある。くり返しになるが、適正な利益を求め、かつ提供することは医療を逆行させるものではなく、健全な運営並びに発展のためには必須の手法である。

3医師会の役割は“存在意義”に重きを置けば、基本的に異なることが明白であり、今まで通りの適材適所の捉え方を継続することは変わらない。しかし、それにとどまらず、情報を送付する場合、その先に発生する困難点を先取りし、その道筋も併記することなど、いわゆる確実な利益を提供すべきである。また、日本医師会並びに県医師会の役員も担当する専門分野においては個々の会員に数多く顔を見せる事業展開も必要である。“知らしめる”のみでなく、“物にしていく”という成果を目的とした仕組みが必要である。幸い、オンラインによる研修会などが繁用され、一時に全会員へ情報を提供できる仕組みも構築されている。これこそ“天の助け”であり、当県の医師会館には放映装置も完備され、現在多用中である。

4 今後の医師会活動

県医師会の現状を見ると、会内に数余の委員会が構成され、役員は複数の委員会に属している。県レベルの医療関連分野には全て県医師会が関与しており、役員は相手側の計画に沿って、県内各地から日常診療を休止しながら対応している。それら諸問題をすべて理解し、対応策を考え、解決を図ることは物理的に不可能である。しかし、これは県医師会に与えられた使命であり、県内医師の誰かが

やらなければならないことである。これこそが県医師会の“存在意義”であるが、多くの会員には理解されていない。この現状から得られる利益は極めて少なく、ジリ貧な負のスパイラルを嘆いても先は見えない。兎にも角にも、“存在価値”を明示できる医師会へ転換し、物を成すことである。その結果“正の循環”が構築されれば、おのずと会員数の増加に直結する。

5 まとめ

県医師会会員数の将来的先細り傾向を不安視し、「県医師会の存在価値」を実践するための方法論について下記3点を提案する。

①《会員との距離感の短縮》

医師会の各委員会担当がオンライン放映

を活用し、全会員に「顔見せ講演あるいは研修会」を数多く開催すること。

②《痒い所に手が届く》

「会員のための医師会づくり」を標語として、適格な情報伝達に勤しむこと。県当局と日医との連携は年々強化されており、情報の内容確認はほぼ可能である。

③《解決能力の発揮》

「積み重ね式解決方法」を採用し、課題の解決を1つ1つ結実化していくこと。担当役員・事務連携の視点の変更と達成感を目指す。

今後県医師会の発展を担う気概のある役員の先生方と事務方への期待を込めて筆を置くこととする。

